

# 池田古墳 発掘調査 現地説明会資料

平成20年12月23日(火・祝)  
朝来市教育委員会  
埋蔵文化財センター

## 1、はじめに

市内和田山町平野にある池田古墳は、但馬の中で最も大きな前方後円墳で、兵庫県でも4番目の規模を有します。昭和46年(1971)の調査で、葺き石・埴輪・周濠を備え持つ古墳であることが確かめられました。その後、10回以上にわたって確認調査が行われています。現在、古墳の大きさや形などの基礎データを得るために、平成18年度から国庫補助事業として発掘調査を実施しており、今年度は3年目になります。

## 2、現在の状況

墳丘は旧状がかなり損なわれており、もとの姿をうかがい知ることはできません。つくられた当時は小高い山であったと想定されます。明治40年前後にJR山陰本線敷設に際して、古墳が削られて土が持ち出されました。埋葬施設がある後円部も削られていて、埋葬施設の詳細は不明ですが、ここから4kmほど離れた高田地区の墓所に長持型石棺の破片があります。長持型石棺は「王者の棺」と呼ばれ、畿内では大王の墓である大規模な古墳に納められていることがわかっています。これらのことから、但馬の王墓にふさわしい池田古墳には、高田地区の長持型石棺が埋葬されていた可能性が高いと考えています。

## 3、これまでの調査

【平成18年度】古墳の後円部東側を調査し、古墳の基底部を示す葺石と造り出しを確認しました。造り出しは古墳から飛び出た部分のことで、祭祀をおこなう場所と言われています。出土した埴輪の中に、但馬では初めての鳥形埴輪や復元すると1mを越える家形埴輪などがあります。

【平成19年度】古墳の後円部北側および西側を調査し、北側で古墳の基底部を示す葺石を確認しました。平成18・19年度の調査によって、古墳の裾の位置が明らかになり、つくられた当初は、現在残っているものよりもかなり大きかったことがわかってきました。

## 4、調査の概要

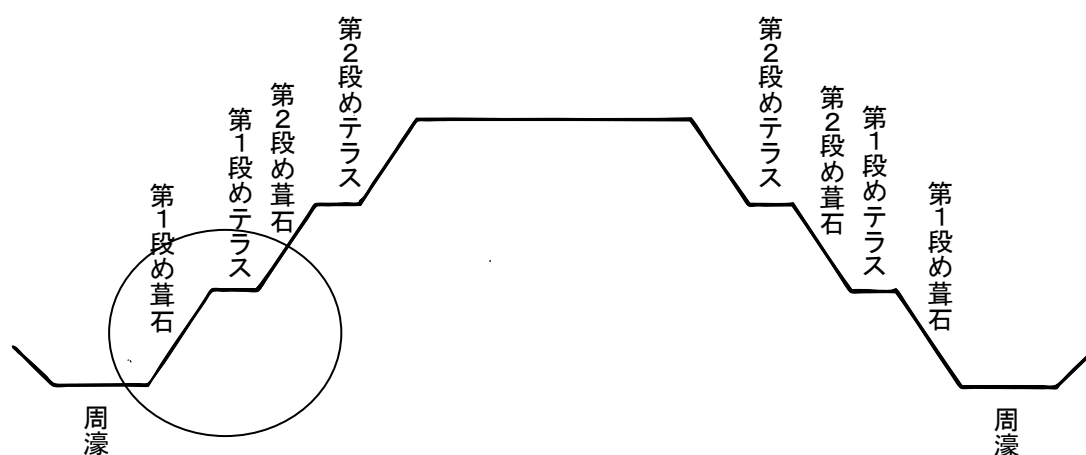
後円部の南側、平成18年度の調査区の西側に、調査区を設定して調査をおこないました。その結果、古墳の基底部(墳裾)を示す葺石と、第1段めのテラス部分、第2段めの葺石を確認しました。

【古墳の基底部(墳裾)を示す葺石】主として角張った石を使って葺石を施しています。確認した位置は、平成18年度の調査で確認した位置とほぼ対応するものと考えられます。

【第1段めのテラス】テラス部分は幅約 3.6mで、今回の調査で初めて判明しました。地形に合わせて、緩やかに前方部側に下っています。ここからは埴輪列を検出しました。据えられた当時の位置を保った状態で9本分確認しており、底部から 10~15cm ほどが残っていました。埴輪は底部の直径が 20~25cm で、埴輪と埴輪の間隔は短く、すき間を少なくして並べられています。埴輪列は西側でのみ確認しており、本来であれば調査区の東側からも埴輪列と第1段めの葺石の一部が現れても良いはずなのですが確認できていません。このことから、後円部に造り出しなどの施設がつくられていた可能性も考えられますが、今回の調査区域内では明らかにすることはできませんでした。

【第2段めの葺石】葺石の位置を以前の調査成果と照らし合わせると、くびれ部を調査したときの位置とうまく対応することがわかりました。石材は主に角張った石を使用し、根石にはかなり大きめのものを使って明確に表していますが、全体の残りとしてはあまり良好とは言えません。また、第1段めの葺石と第2段めの葺石は、葺かれている角度がかなり違うことがわかりました。第1段めに比べ第2段めの角度は緩くなっています。もともと角度が異なっていたのか、削られてしまったのかは不明です。池田古墳は傾斜地につくられており、もともと後円部側が高く、前方部側が低くなっています。そこで、全体の高さを調節するために、わざと後円部の第2段めの葺石の角度を緩くした可能性があります。このことは今後さらに詳細に検討すべき課題と考えています。

【出土した遺物】今回の調査で出土した遺物はほとんどが埴輪で、そのうち円筒埴輪と朝顔形埴輪が大部分を占めます。形象埴輪は盾形埴輪と思しき破片がわずかに見られる程度です。古墳がつくられたときに据えられたままの埴輪が確認されたことは、当時に姿を復元する上で貴重な発見であるといえるでしょう。



墳丘模式図

※○で囲った部分が今回確認した箇所です。

## 5、まとめ

今回まで3回に及ぶ調査では、後円部の墳裾の位置、葺石の様相、造り出しの存在などがわかってきました。墳丘部がけずられています、下段の葺石の残存状況はかなり良好であることが判明し、地下に遺構が保存されている、池田古墳の様相を教えてくださいました。

池田古墳がつくられた時期は、出土した埴輪から5世紀初め頃、史跡茶すり山古墳よりも古いと考えられます。但馬で最も大きい前方後円墳である池田古墳は、確認した遺構（葺石やテラスなど）・遺物（埴輪）から、畿内の中心部でつくられた古墳と遜色のないものであることがわかりました。このことから、畿内を治めていた大王と密接な関係を持った人物がここに葬られたと考えられます。

今後の課題としては、前方部側の墳裾が明確に把握できていないこと、後円部西側（山側）の墳裾がどの位置にあたるかなどが挙げられます。周辺も宅地がすすみ、特に前方部については調査できる場所も限られています、地元の皆さんもご理解を得て、データ収集を進めていきたいと思えます。



上の石が第2段め葺石、  
第1段めテラス部分と埴輪列、  
下の石が第1段め（基底部）葺石



第1段めテラスの埴輪列

